

町小だより

令和6年
1月30日
No. 682
御免町小学校

雪は天から送られた手紙

校長 相澤 祐助

元日に発生した能登半島地震で亡くなられた皆様の御冥福を衷心よりお祈りします。また、被災された皆様への御見舞いと、いち早い復興を心よりお祈り申し上げます。

寒さが厳しい朝、気温はマイナスでした。校門に立って子どもたちを迎えている時、黒いジャケットの袖に、雪がひらひらと落ちてきました。よく見ると「六角形」の形をした雪の結晶でした。きれいだなあと感じながら、ずっとながめているとその雪は静かに溶けていきました。



私は子どものころから雪が大好きで、雪が降るといつも外に出て雪遊びをしていました。一人でかまくらづくりをしたり、雪だるまをつくったり、友達と雪合戦をしたりしたものです。手を真っ赤にして家に戻り、その手をストーブに近づけると、むずがゆくなるあの感じがたまらなくおもしろかったのを覚えています。

学生時代は野外教育を専門に研究していたので、よくキャンプや登山をしました。夏はテントを使って快適に過ごせますが、雪の上でテントを張って泊まることはできるのか、かまくらの中で生活することはできるのか、こんな疑問がずっと頭の中をめぐっていました。そんな時に出会ったのが、中谷宇吉郎博士の言葉です。



中谷宇吉郎博士

中谷博士は、昭和6年、アメリカで出版された『Snow Crystals』という雪の結晶を集めた本に魅了され、雪の結晶の研究を始めた物理学者です。日本に降る雪の結晶はとても種類が多いことを調べ、さらに、うさぎの毛を使って人工雪を作り出す世界初の実験に成功しました。雪の結晶はその日の気温、湿度、風などに影響を受けて発生し、雪の結晶を見ると大気の情報に分かるというのです。「このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれているのである。」^(※1)「われわれは大きい自然の中で生きている。この自然は、隅の隅まで、精巧をきわめた構造になっている。その構造には、何一つ無駄がなく、またどんな細かいところまでも、実に美しく仕上がっている」^(※2)

※1『雪』(岩波文庫)、※2『自然の恵み—少国民のための新しい雪の話』より

私たち人間も、大いなる自然のもとで生まれた存在です。そして、誰もが大切な命を宿したかけがえのない存在です。雪の結晶は、どれ一つとっても同じものではありません。人間もそうです。みんな個性があり、輝くものをもって生まれています。

今、町小の子どもたちは、学年のまとめに取りかかっています。この1年間の学びを仕上げ、次への段階に向かっていきます。一人一人の学びを、輝きを大切にしながら3学期をより充実したものにしていきたいものです。6年生は卒業に向けて、5年生は来年のリーダーに向かって、仲間とともに笑顔で精一杯活動しています。

毎朝、寒い朝でも、元気に「おはようございます」と声をかけてくれる町小の子どもたちの笑顔は、まさに天から送られた手紙のようでもあります。